

## 「ミクロ経済学 戦略的アプローチ」

梶井厚志、松井彰彦（著）

日本評論社 2000年2月25日刊

経済学は矛盾した学問である。それは経済学者が「10の質問に11の答え」を出したり、「同じ質問をしても答えが変わってくるので、毎年同じ質問を繰り返す」とうそぶく教授がいたりするというだけの話ではない。

一方では、この十年間の経済運営の失態から、経済官庁、中央銀行、民間企業などほとんど全ての経済関係者が批判にさらされてきた。その結果、経済学は現実の問題を解決できない役立たずの学問であるかのように言われ、また、大学入試における経済学部離れも目立つようになった。

他方、経済学を容易に理解したいという欲求から、対談形式の経済学入門書、漫画による経済学、予備校型のチャート式経済学など様々な本がベストセラーになっている。役立たずのはずの経済学が一般社会人や、経済学を学んだことがなかった人の間で学ばれるようになってきたのである。

この矛盾した現象には、いくつかの解釈が可能である。第一に、結局、人間の生活において経済活動は避けて通れないとすれば、やはり少しでも経済の原理を知っておくべきであるという解釈。第二に、経済学者を含めて、経済を本当に理解している人が少ないとすれば、少し勉強すれば他人より高い所得を得ることができるかもしれないという解釈。第三に、経済運営の拙劣さは、経済学が間違っているからではなく、それを運用した経営者や政府、官僚が間違っているからである。その証拠に絶好調のアメリカ経済でも、わが国と同じような経済学が教えられ、政策分析手段として用いられているのではないかという解釈。第四に、医学や法学はかなりの勉強を経て、それを専門的に運用する人に国家資格が与えられるのに対して、経済学やそれを体現している経済学者には厳しい試験の課される国家資格など何もなく、安易にマスターできる学問かもしれないと思われているという解釈。

評者は全ての国民が経済活動に直接、間接に関わっており、経済の原理を知ることには、憲法を知ることと並んで、極めて重要な国民としての基本的素養であると考えている。現代のような不確実性に満ちた状況の下で、未知の経済現象に直面したときに、その根本原理を読み解いて、自分なりの対応を考える道具としてどのような経済学を学べばよいのだろうか。ここで、お勧めしたいのが最近のミクロ経済学の良質の教科書である本書である。本書はごく簡単な設定の下で、企業や個人の戦略的行動がどのような帰結をもたらすか、あるいは逆に、その帰結から推測して、どのような戦略的行動をとるべきかということを原理的に理解できるように書かれている。使用している道具は最近流行のゲーム理論であるが、決して難解ではない。むしろ、現代のビジネスでは戦略的にものを考えることが必須であるとするならば、避けて通れない内容であるともいえる。すなわち、最近の経済学の主要な関心事である、情報の問題、金融とリスクの問題、

経済契約の問題、オークションの仕組みなどが取り上げられているのである。

残念ながらというべきか、当然ながらというべきか、本書はベストセラーのキャッチフレーズにあるような「5分でわかる経済学」というほど軽い本ではない。「ローマは一日にしてならず」という言葉があるように、真剣に取り組むためにはそれなりの時間がかかるであろう。しかし同時に「全ての道はローマへ通じる」という言葉もある。本書を読破して経済学の基本的な考え方を身につければ、それを自らの問題に応用することは、それほど難しくないはずである。

本書を読んで、戦略的な考え方のビジネスへの応用に関心をもたれた方は、『組織の経済学』ポール・ミルグロム、ジョン・ロバーツ(著)(NTT出版)や『戦略的思考とは何か』アビナッシュ・ディキシット、バリー・ネイバブル(著)(TBSブリタニカ)、『経営戦略のゲーム理論』ジョン・マクミラン(著)(有斐閣)などに読み進まれることをお勧めする。